

## ことばの背景に切り込む読み

——上級教材の扱い方——

坪 井 佐奈枝

### はじめに

漱石の「夢十夜」は「こんな夢を見た。腕組みをして枕もとにすわっていると、あおむけに寝た女が静かな声でもう死にますという」という文で始まる。レベルの低いクラスでこれを読むと、学生は「枕もとにすわっている」を「枕の上にすわっている」と思いこみ「あおむけに寝た女…」を「たぶん今度は寝て、それから死にますと言ったんだろう」と解釈する。自分流にわかるところだけ拾って辻褄を合わせようとすればそうともとれる——誤解する要素は確かにあるのだ。まず、日本人にはなじみの主語省略文であって、しかも腕組みが従来は男のスタイルであったことを知らない外国人の学生には、腕組みをしてすわっているのは男であることが想像できない。だから「すわっていると」の「と」を無視して、あおむけに寝た女が別の存在であることには気づかず、寝ている事実を頭の中で描き、“想像力”で「寝る」という動作をつけ加え、その勢いで次には「死にます」というようになるらしい。日本人ならまず避ける、枕の上にも平気ですわってしまったりするわけである。これはまだ文脈を辿ろうとする意識が働いている方で、すわっているのがだれかに疑問も感ぜずに素通りしてしまう学生もある。辞書的な意味あるいは母国語に単純におきかえられれば、それでわかったように気になってしまう。

このようなことは、日本人が外国語を学ぶ場合にもしばしば問題とされ、外国語教育に共通の問題点だといってよさそうだ。そればかりか、日

本人が日本の古典を学ぶ場合にも同様なことが指摘できる。「去来抄」に「岩鼻やここにもひとり月の客」という句がある。これについて同僚がこの「客」は「猿」にしたかどうかというので、去来が師なる芭蕉にお伺いをたてると「猿などとはもつてのほか、ここにもひとり月をめぐる客がいると自分で名のり出たとした方がずっと風流だ」と作者去来の作意を越えた解釈・鑑賞を示したという文章がある。高校生にこれを読ませたとき、確かに一字一句を現代語訳することはできるが、単なる移しかえで、結局この文は何を言おうとしたのかを理解していなかった。ここに問題がある。つまり、意思を伝達するために書かれた文章であるのに、文字は読んでいても、あるいは読めていても、肝心の意思をくみとることを十分に意識していないか、あるいは文字を読むことに精一杯で、そこまで到達できない状態にあるといっているだろう。

本稿は、このような問題をどう扱えばよいのか、すなわち、書き手の意思を十分に読みとり、さらに文学作品の場合なら、前述の「去来抄」の例ではないが、作意を越えた鑑賞にまで到達するにはどうすればよいのかを考究してみたい。加えて、ことばの背景に切り込む読みを支える条件となる上級教材の扱い方についても述べてみたい。

## I. 上級教材の扱い方

### 1. 教材

#### (1) 上級教材とは

教えるためには、まず教材を用意しなければならない。しかし、上級教材となると「上級とは何か」ということが問題となり、これは大変むずかしい。ICU（国際基督教大学）の教科書も上級とは書かず「初級・中級に続くもの」という表現をとっている。早稲田においても一般に、中級教科書を終えたあとを上級クラスと呼んで、さまざまなテキストを選んでいる。

最近では「advanced level」とか「進んだ段階」ということばを使って

「上級」を使わない場合がある。例えば「講座日本語教育」第12分冊には、「進んだ段階における理解と表現」(木村宗男)「進んだ段階における漢字指導の問題」(北条淳子)とある。しかし、この段階の定義を木村氏は「生教材を使って学習する段階を、かりに『進んだ段階』ということにする、このあとに『より進んだ段階』があるだろうし『進んだ段階』の手前に『やや進んだ段階』というものがあっていいと思う」ということで、上級の前期と考えてよいのに対し、北条氏は「進んだ段階というのは、初級を終った段階、つまり1年か1年半の学習期間を経た時期」「中級から上級のはじめの段階」としてあり、時期は必ずしも一致していない。

こうみてくると「上級」の定義もあいまいであるが、「進んだ段階」というのも、基点をどこにおくか、どこより進んだ段階なのか、明確にならない。それでは上級とはどんな段階か、初級・中級を終えた段階ということとはできる。語研の場合、初級週20時間15週と中級週10時間15週のコースで1年間450時間というのが標準である。だが、これは intensive の場合で、受講地が母国か日本かによっても差は出てくるし、また個人差も大きい。従って一律に学習歴を何時間とか、何年とかでは表しにくい。学習歴2年前後<sup>1)</sup>とか300時間で3年生<sup>2)</sup>とかかなり幅があるようだ。

## (2) 編集されたテキスト

「上級」の定義はあいまいであるが、具体的に上級教材にはどんなものがあるか、見てみよう。編集されたテキストは、編集者が「上級教材とは何か」を総合的に捉えた一つの結果であるから、新たに別の教材を選択する場合にも参考になる。

- ・長沼直兄「標準日本語読本」再訂 巻4・5 長風社 1967
- ・国際学会友「日本語読本」巻4・5 1962
- ・ICU「Modern Japanese for University Students」Part III 1966
- ・Hibbett & Itaska「Modern Japanese」25~60 課 ハーバード大

1) 北条淳子「上級クラスにおける読解指導の問題」日本語教育21号

2) 塩田勉「上級教材としての『よたかの星』」講座日本語教育、第13分冊

1965

◦ R. A. Miller 「現代日本文読本」 38 課～75 課 Tuttle 1962

◦ 文化庁「外国人のための日本語読本」上級 1969

◦ 板坂・牧野・山下「上級日本語読本」講談社 1974

なお、教科書については、教師用日本語教育ハンドブック別巻1「教科書解題」(国際交流基金1976)がある。

(3) 編集されていないテキスト(生教材)

新聞 雑誌 単行本(児童書から専門書まで) テープ VTR  
スライド 映画

その他使い方次第ではほとんど無限といっていいただろう。

## 2. 教材の選択

(1) 外的に規制される条件

a. 対象になる学生の学習歴, 学習目的, 国籍, 年齢, 性別, 専攻

b. クラスの人数

c. 他の日本語授業との兼ね合い

d. 担当する期間(1年か1学期か)

週担当時間(週1回か3回か)

e. 精読か速読か, 聴解か作文か

f. 文学か教養か言語か

e・f は語研の場合, 日本語教室からあらかじめそのような範囲で選んでほしいという指示があったことによる。

(2) さまざまな角度からみた条件

a. 教材への配慮

◦ 文法的要素, 語彙レベル(例えば, 本・書物, 薬禍・くすりの害),  
漢字

◦ さまざまな文体にふれさせる

◦ 易から難へ



◦ 入手しやすいもの

b. 目標によって

◦ 学習到達目標

◦ 学生の希望

“新聞が読めるようになりたい”というのは学生からよく出される希望である。“新聞が読めるように”という学習目標をあげれば、教材の選択の範囲は決められてくる。

◦ 教師のねらい

冒頭にあげた「夢十夜」の例は、初級をようやく終え、あと1か月で学期が終了し、帰国するという学生に、ホンモノが読める、しかも漱石の小説が読めるようになったのだという喜びを味わわせ、自信をもたせたいという教師の意図があった。だからレベルとしては高いものを教材として与えたために、珍解釈が起ったのである。

c. 日本および日本人について知ること

◦ 日本人の思考法、感情、生き方、習慣など

◦ 日本の風俗、地理、歴史、経済、政治など

◦ 比較文化の観点から

留学の目的はさまざまであっても、来日した学生は少しでも日本を知りたいという願望をもっている。日本語で日本を知るのがベストであることはいうまでもないだろう。また、日本語に熟達した外国人の文も、模範、目標として考えられるからか、親近感をもつようである。日本人が書いた例えば「アメリカの生活」といったものは、違ってみかたができるので、いろいろと議論を呼んで、話すための好材料となる。だが、知的好奇心の旺盛な学生には好まれないようだ。

d. 教師の感動した文章であること

教材とするからには、くりかえし何度も読むわけであるし、文、語句というように分析していくものであるから、それに耐え得る文章でなければならない。では、完璧な文章を探せばいいかというと、それ

よりもむしろ、読んで心を動かされた文章であることの方が重要だといえよう。読めば読むほど深く、味わいのでてくる文章、そういうものを教材として選びたいものである。

既成の教科書は、文章としては完璧であるだろうが、感動できる文章であるかどうかは問題である。感動する対象は読む人によってあるいは時や場合によってもちがうものであるから、他人が編集した教科書の文章のすべてに感動できるはずはない。教師が教えたいという情熱が持てない文章を、学生に与えていい結果を期待するのは無理というものであろう。その感動は美なるもの、真なるものとかいう範疇のものだけでなく、科学者の冷徹な目で捉えた現象を淡々と綴った文章であってもいいし、巧みな構成と簡潔なことばでできているなら、たとえ絵本<sup>2)</sup>であってもいいはずである。この幅を広くすることは、教師として重要な点であろう。それが単に教師の偏執的な好みに片寄ったりするのではなく、あくまでも学生に与える教材としての適否をふまえることはいうまでもない。

### 3. 選ばれた教材

実際にどんな教材が選ばれているか「早大語研上級クラス使用教科書一覧」(昭51)によってみてみよう。これは昭和41年度から51年度にかけて使用された教科書のうち、市販の図書に限って整理されたパンフレットである。年度別に使用教科書が記載され、さらに、内容別に分類されている。この分類により、さらに使用回数を合計したものが、下記の表である。

- A. 書名の種類と同時に使用数を表す。
- B. 同じ書名の本を他年度にも使用した数の合計
- C. 延べ使用回数

---

3) 谷川俊太郎・文、長新太・絵「わたし」福音館書店

内 容	A + B = C
(1) 科学, 自然, 技術	24 4 28
(2) 政治, 経済	5 1 6
(3) 言語, 言語生活	37 17 54
(4) 文化, 社会, 歴史, 地理	55 23 78
(5) 教養, 生活, 趣味その他一般	41 7 48
(6) 文学	55 15 70

上記の分類のうち (3) は日本語そのものを内容としているものがほとんどであるし, (6) もすべて日本人作家のものである。他の (1) (2) (5) についても書名に「日本」という文字のあるもの (「日本の自然」「日本人の智恵」), 内容が「日本」を扱っているもの (「火縄銃から黒船まで」「甘えの構造」) など 44 種類にわたっている。また, 対象がアメリカ人である国際部上級クラスにおいては「アメリカの家族, 日本の家族」のように両者を比較したもの, 「ああアメリカ」「孤独なアメリカ人」といった日本人がとらえたアメリカ (人) 観なども教材としている。これは前にも触れたが, そのとらえかたに関する反論などがでやすく, 話題設定に好都合のようである。

#### 4. 教材の扱い方

教材を選択するさまざまな条件から, 選ばれた教材の教授法は自ら決められてくる。「上級教材使用報告書」その他から授業形式をいくつかとりあげてみる。

##### 例 1. 精読の場合 (論説文)

- ① 文法事項や言いまわしの説明
- ② 必要な語句を取り出し説明
- ③ ② を正しく理解したかどうかチェックするため, 練習問題をさせる。

##### 例 2. 速読の予定であったが, 学生のレベルに合わず取った方法 (短篇小説)

- ① 読み聞かせ

- ② 漢字の読み方一覧表配布，辞書で予習させる。
- ③ 教師が選んだ語句につき，用法の練習，同じことを宿題として課し，添削する。
- ④ 内容に関する質疑応答，討論
- ⑤ 大意要約(口頭)，宿題として200字作文
- ⑥ 作文の共同添削

### 例3. 聴解力の養成

学生には本を持たせず，教師のみが内容を読んでおいて，教室では板書しながら話す(講義の形式)。学生は聞きながらノートを取り，それに基づいて要約文を作成し時間の終りに提出する。宿題としない。提出された要約文を添削して次回に返し，まとめて注意を与える。とくに漢字系学生の漢字熟語聞き分けの訓練になった。(詳しくは，木村宗男「テキストを使わない授業の試行報告」ILT NEWS 55・56 1975. 3 参照)

### 例4. ゼミナール形式

文章を意味，内容から区切り，ひとまとまりの部分を各々学生に分担させる。教室では担当した学生が“先生”となって授業を進める。ほかの学生に読ませたり，質問したり，短文を言わせたり，もちろん自分で説明したり，要約したり，させたり，その学生の創意によって授業は進行する。教師は適宜補足する。(詳しくは，拙稿「上級教材・母の像シリーズ」ILT NEWS 62, 1977.3 参照)

## II. ことばの背景に切り込む読み

これまで何をどう選ぶかと，いくつかの教授法のタイプについて述べてきた。すでに授業方法についてはILT NEWS 62号で述べたので，次に，具体的に私の選んだ教材を用いて，ことばの背景にどう切り込むかについて述べてみたい。

母は東京下谷二長町の生れ。彼女の父は公卿の元用人(使用人)で母は元旗本の養女というから、典型的な没落階級の出身である。小学校高等科(現在の中学)を卒業すると女中奉公に出された。その先が尾崎家で、このほうは、やはり同じ公卿の用人仲間であるが、大出世をして明治政府の高官になっていた。彼女はそこの五男坊と恋をして僕を生んだ。彼女は女中奉公といってもいわゆる小間使い(昔なら腰元)で、「炊事洗濯まるでダメ」の口である。これが後々までたたった。

彼女の夫、つまり僕の父になった尾崎の五男坊は、センスはあるが、わがままでサラリーマン勤めができず、一生涯、定職がなかった。したがって母は、親と夫と二代にわたった没落階級の貧乏暮らしを余儀なくされた。僕が小学校を卒業する時、母は学校へ呼ばれて、あんたの息子は府立一中(現在の日比谷高校)か東京高校(七年制高校)へ入れたらよい、といわれた。帰ってきて父にそのことを話すと、父に「とんでもない、早く学校を出して働かせなくては」と一喝されて、僕を商業学校へ入れた。結果として僕は満足に中学教育を受けることができず、後年、大学へ行くのにだいぶ苦労した。しかし彼らは子供を満足に学校へもやれないのに女中を置いていた。母の説明によると、父が気むずかしい坊ちゃんで、母はその身のまわりの世話をするのが精いっぱいだったから、その他の家事には手がまわらなかった、というのである。だが真相は、先に述べた「炊事洗濯まるでダメ」で、主人の身のまわりの世話だけにはげむ腰元気質の延長だったらしい。

子供が成人して亭主の權威が地に落ちると、母は大変な社交家になった。彼女は小間使い時代に習い覚えた謡曲を武器とし、地域の謡曲の先生ということでもいい顔になっていた。当時はもう女中も置けなくなったので、彼女が夕食のための買物に行くのだったが、これが、出たら最後までも

に帰ってきたことがなかった。腹を減らして待っている僕らを前にして、「あーら、遅くなってごめんなさい。いま途中で話の長い奥さんにつかまっちゃってね」というのが口ぐせだった。僕は面白がって、「そうだな、今頃町中の奥さんが、話の長い奥さんにつかまっちゃっていいわけしてるぜ」とからかった。母はけろっとして、「何とでもおっしゃい。あーら、あんまりあわててお大根買い忘れちゃった。誰か行ってきてえ」てんで、気のいい僕の弟が、彼女が買い忘れた大根だの醤油だのを買い足しに行かされた。ちょっと今日の東京辺では見られない大物だったと思えばよい。

(東京大学文学部事務長)

これは子どもを守る会編集の月刊雑誌「子どものしあわせ」(草土文化刊)の巻頭に、見開き2ページ(約800~1200字)で組まれた〈母の像〉という随筆の一篇である。毎月各界の人々が、わが母を追懐して綴ったもので、読者の人気も高かったのか、そのうち50篇ほどが抜粋され、単行本『母の像』(草土文化1976)になった。

実際に授業として行う場合には、ゼミナール形式で自主的に進めるわけだが、教師としてのプランはなければならない。つまり、学生が進めることが中心ではあっても、教師がこの教材を扱う目標をおき、何を教えるか、どの語句を問題としてどの文型で練習をするかなどをあらかじめ考えておき、適切な助言、補足をすることが必要である。そこで教師のプランとして、次のような事項をあげてみた。

## 1. 語句

### a. 現在はもうあまり使われていない時代めいた語句

腰元、気質、公卿、用人、旗本、女中奉公、小間使い、女中を置く

本文には、「用人」は使用人のこととカッコで説明してあるが、広辞苑に「江戸時代、幕府・大名・貴族又は旗本の家で、老臣の次に位し、出納・雑事に当った職」とあって、現在の使用人のイメージとは少しちがう。こういう理解をしなければ旗本の養女との結婚は成立たないはずである。

「女中奉公といってもいわゆる小間使い(昔なら腰元)で…」とあって本文だけ読んでも、「女中」「小間使い」「腰元」ということばの大体の感じはつかめる。腰元は「貴人の側に仕えて雑用を掌る侍女」であり、台所仕事などはしない。

b. 固有名詞

東京下谷二長町、明治政府、府立一中(現在の日比谷高校)、東京高校(七年制高校)

「下谷区二長町」とは現在の御徒町付近で明治13年の地図にも載っており、鏡花の作品などにも出てくる地名で、市村座のあった所である。だが、この二長町の生れということが、“浅草生れ”“神田の生れ”といったほど、具体的にイメージが浮んでこない。二長町についての知識不足でここでは“江戸っ子”という程度の認識でしか読めなかった。

府立一中が当時の秀才を集めた学校であり、商業学校が一段落ちることなどには触れておきたい。

c. 普通の語句

養女、典型的な没落階級、明治政府の高官、定職、余儀なくされた、一喝、後年、真相、気むずかしい、精いっぱい、

以上のことばは辞書的な意味でほぼ足りるといえる。だが「没落階級」ということばをとりあげてみると、辞書には「没落」の意味として「栄えていたものが衰え滅びること」とある程度である。しかし、もっと具体的にことばのイメージを捉えようとすれば「以前は地位があつて、社会的にも経済的にも優位であつたが、社会的変革(この場合は明治維新)のあとは、それらがすべて失われ、しかもその上部構造である人間の意識だけは変わらず、時代に適応していけない弱い階級」といい直せばもっと明確になる。また、もっと卑俗な表現をすれば「お金もないのに、気位だけ高い人たち」であり「収入が少ないのに、以前の生活習慣を捨て切れない人」のことであると、具体的にとらえていく。

すべてのことばをここまで“表現”する必要はないが、頭の中で消化し

ておかないと文字面だけの理解にとどまってしまう。

d. ユーモラスな文体を構成している語句

典型的な没落階級の出身、その先、このほう、用人仲間、大出世、彼女、五男坊、「炊事洗濯まるでダメ」の口、たたった、彼女の夫、あんたの息子、学校へ入れたらよい、真相、～にはげむ、腰元気質の延長、亭主の權威が地に落ちる、大変な社交家、～を武器とし、いい顔になって、これが出たら最後～、話の長い奥さん、けろっとして、今日の東京辺、大物、～と思えばよい

。「出身」ということばはふつう「早稲田大学出身、ハワイ出身の高見山、農民出身の作家」のように、その学校の卒業生であるとか、その土地の生まれであるとか、その身分を経てきていることなどを表す。だから武家の出身であると書けば、これは普通の表現であるが、「没落階級の出身」としたところにユーモラスな味が出てくる。

。「炊事洗濯まるでダメ」の口の「口」は、「～のたぐい、種類」をさすものであるが、「料理洗濯まるでダメ」は同内容でよいとして「お茶やいけ花まるでダメ」はどうであろう。「酒もタバコもまるでダメ」は“堅物で融通のきかないつきあいにくい奴”と両方を嗜む輩が揶揄している場合にはいいのかもしれない。「読み、書き、ソロバンまるでダメ」など、あれこれ唱えてみると、“ゴロのよさ”を備え、当然あるべき能力がない場合をさしているときはよさそうだ。お茶やいけ花はそう考えるとあてはまらない気がする。

このように語彙の拡大を行っていくうちに、深い意味に達する場合も多い。語彙の拡大は当然教師のプランの中に含まれねばならぬもので、

腰元気質、学生気質、職人氣質、早稲田気質、

養女、養子、養父、養父母、

などあらかじめコピーしたものを渡すようにしておくこともよい。また、定職から、定食一定員一定期一定休一定義など、既習の熟語をあげさせて「定」の意味をはっきり掴ませることも考えられる。



。「たたる」は本来「神仏、怨霊などから悪いむくいがある」ことだが「害となって悪い結果が起る」ときにも用いる。「徹夜がたたって頭が痛い」というように――。

。「センス」は「①物事の微妙な感じ、あるいは意味をさとする働き。勘 感覚 ②思慮、分別」とある。この文章で父をプラスの評価で語っていることばはこれしかない。つまり、無能ではないのに、自己の力を発揮できず、社会的に認容されないタイプ、二代目の典型的タイプといえよう。漱石の高等遊民や白樺派のお坊っちゃんと同世代であるわけだが、この作家たちない登場人物は、それとして生き得たのに対し、この五男坊は活路が拓けなかった口である。だから「センスはあるが」は重要なことばである。

。「学校を出す」「学校へ入れる」「大学へ行く」「学校へやれない」「奉公に出す」自分の意志で「大学へ行く」つまり進学するのと、親の意志と経済的裏づけをもって「息子を大学に入れる」のとは同じ事実でありながら話し手の気持がちがう。「子どもを使いにする」「奉公にやる」「嫁にやる」のは、すべて権威をもつ者がその意志によってする行為である。「奉公にやる」は「奉公に出す」と同じで、その後、奉公先で不始末があれば主人から「ひまをやる」といわれ「ひまを出され」てしまうわけである。ここの「学校へやれない」は経済的能力がないことを意味している。「学校を出す」は「学校に入れる」の対で卒業させるということで意志は他者にあり「学校を出る」つまり卒業するは自動詞である。

。「真相」このことばが使われるのは素直に「事件などのほんとうのありさま、事情」を述べたときには必要なことばでなく、事情などが表面的、形式的でタテマエの説明しかない場合に、「実は～」とホンネが出、真相はこうだと暴くときに用いることばである。だから「実際は」と言いかければ十分意味は通じるが、それだけではユーモアはわからない。

。「いい顔になる」は「顔がきく」とも使い「あの人はあそこでは(いい)顔だから」といえば「顔を見せるだけでさまざまな便宜をはかってもらえる」場合をいい、決して「きれいな顔、立派な顔」ではない。「大きな顔

をする」が「いばる」であったり「顔が売れる」が「有名になる」ことなども触れたいところである。

。「大物」は「ある方面で大きな勢力、能力を持っている人。だれから一段上だと見られるような者」さて、彼女はどのような大物とされているのであろうか。これは最後の段落すべてで説明している通りである。

## 2. 文 体

1-d で扱った語句の項は、文体と不即不離の関係にある。「文章作品を読んでわれわれが直覚的に受け取るものは、文章の構造的事実ではなくて、文章全体から発するあるまとまった印象である。これがわれわれにとっては第一義的な事実なのである。この印象をわたしは文体映像と名づけようと思う。文体映像は、作者側からいえば文体効果であり、観賞者側からいえば文体印象である」「もっとも下位の、つまり、われわれ観賞者の直観に訴えるところのものは、文体効果である。この効果を生ずる直接の原因は、一定の文章構造すなわち文体である。かかる文体をなにが要求したかといえ、それは当の作品のモチーフである」(小林英夫「文体論の建設」)この作品のモチーフはいうまでもなく「母」である。この「母」は、亭主が定職もなくわがままであるのに、少しも悲観的でなく大らかに屈託がない。この母を描くのに、文体印象がペシミスティックであったり、粘液質のものであったりしてはおかしいし、また、そういうことはありえない。しかし、同じ内容を述べる場合にも、作者の対象の捉え方が変れば当然異なった文体になってくる。例えば

「母は東京下谷の生れである。公卿の用人を父とし、旗本の養女を母とする武家出身であった。が、没落し、高等科を卒業するとすぐ尾崎家の女中となった。尾崎氏は以前父の同僚で、当時は明治政府の高官であった」

淡々と事実を要約的叙述態度で述べたものである。母親を悲劇的に見立て、没落したことを同情的に捉えれば

「母は東京下谷で生れた。祖父は公卿に仕える高官で、祖母は旗本の養女であったから、母はだいに育てられるはずであった。が、維新ですべてを失ってしまい、高等科を卒業するとやむなく女中に行かねばならなかったのである。奉公先の尾崎家は元の同僚で、こちらは逆に立身出世をして明治政府の高官にまでなっていた」

というような文となる。だが作者は母を分身の元、母胎というような、感情的に切り離せない関係から遠くし、客観化して描写している。たとえば

彼女の父、養女というから、このほうはやはり同じ公卿の用人仲間であるが大出世をして――、彼女はそこの五男坊と恋をして僕を生んだ、彼女の夫つまり僕の父、あなたの息子、彼らは子供を――、～というのである 以下略

文中「彼女」を7回使用している。すべてを「彼女」と表現しているわけではなく「母」も7回使っている。どんな場合に「母」を用い「彼女」というのかを調べてみると

- 彼女の父
- 彼女はそこの五男坊と恋をして
- 彼女は女中奉公といっても「炊事洗濯まるでダメ」の口である
- 彼女の夫、つまり僕の父になった尾崎の五男坊
- 彼女は…謡曲の先生ということといい顔になっていた
- 彼女は夕食のための買物に行くのだが
- 彼女が買い忘れた大根

「母」とおきかえると文として成立たない例、「彼女の父、彼女の夫」もあるが、これも含めて客観化した場合、つまり〈母の像〉としていわゆる一般的・常識的にみてあてはまらない線上のこと、“明治の女”として落第の烙印を押されそうな事に関してはすべて「彼女」である。この態度は「しかし、彼らは子供を満足に学校へもやれないのに女中を置いていた」の部分にも現れる。そして敬愛する母、感情の距離をもたない場合は、母を自然に使っている。

- したがって母は、親と夫と二代にわたった没落階級の貧乏暮らしを余儀なくされた
- 僕が小学校を卒業するとき、母は学校へ呼ばれて...
- 僕らは面白がって「今頃町中の奥さんが、話の長い奥さんにつかまっちゃっていいわけしてるぜ」とからかった。母はけろっとして

「母はけろっとして」でそれまで戯画化して描いてきた「彼女」の真相がここで暴かれたわけで、ここは前にならえば「彼女」とするところである。が、母」である方がかえって自然であって好ましい。

つまり、女大学式の〈母の像〉としては失格であった母を、失格の面から捉えれば、もっとねばねばした文体になるところだが、作者は母をその欠点をも覆う大らかさ、屈託のなさ、人間としての豊かきの点で捉え、それを客観化したところに、ユーモラスな文体が成立したのだと考えられる。この文章は小林英夫の言う「作者の側からみた文体効果」を十分にあげ得た例、つまりこういう文体なしには成功しなかった文章だといえよう。

なお、この教材で学生から疑問が出て議論を呼んだのは「彼女はその五男坊と恋をして僕を生んだ」という文である。つまり「僕」を女中との不義の子、暗い運命を背負った子だと思ったという。これは世の東西を問わずよくある話であって、主人が女中に「手を出す」という表現すらある。人間ではなく奴隷としてみた女中には何をしてもかまわないので「スキを見せたお前が悪いのだ」と一方的な責任転嫁で、主人ないしは息子にキズがつかないように、というより家名を汚したくないためにのみ処理され、女中は“不用品”として捨てられてきた。しかし、この文の場合には多分そうではないだろうということを明らかにするのに、江戸時代から明治初年にかけての日本人の意識に触れる必要が生じた。公卿の用人とは先に語句の項でみた通り高官であって、没落したとはいえ気位は高かったにちがいない。だから、女中奉公にやるといっても「腰元」であったことは当然である。口減らしや身売りによって奉公する百姓や町人の娘とはちがって、腰元というのは、富裕な町人の娘ですら行儀見習いのために謝礼を

出してまで行かせる花嫁修行のようなものであった。従って道楽息子と一方的に受身の立場にある女中との関係とは言い難い。当時も結婚は身分の高低がかなり問題であったろうが、尾崎家へは公卿の用人仲間であった縁で出されたのをみると、長男以外との結婚は親同士も予想していたとさえ考えられる。

否定し得るもう一つの根拠は「彼女はそこの五男坊と恋をして僕を生んだ」という文内容・文体である。決して受身でなく、主体的に恋をしたのである。それはこの文章の後半に現れる彼女の快活さや「今日の東京辺では見られない大物だと思えばよい」という文からみても想像できる。当時、女中という立場で主体的な恋愛ができるはずがないともいえるが、主人と女中との不倫という暗いイメージはこの文体からは読みとれない。以上のように文化的背景を探ること、文章を丹念に読むことから疑問は解決できたわけである。

もう一つの問題となった箇所は「子どもが成人して亭主の権威が地に落ちると、母は大変な社交家になった」というところである。子どもが成人するといえば、法的には20歳になった時であるが、それで亭主の権威がなくなるわけではない。おそらく学校を卒業した子供が就職して月給を持ってくるようになったからであろう。この父は「一生涯定職がなく...早く学校を出して働かせなくては」と言っているからである。経済基盤が夫から息子へ移ったとたん、それまで地中に埋もれていた彼女の個性が解放されて、一時に芽吹き始めたのである。そこで彼女も夫に気兼ねするところなく、謡曲を教えて自ら楽しむと共に、彼女なりの経済力も併せ持つようになったのだから、大変な社交家になるのも当然といわなければならない。

### 3. 構成

これは1,100字ほどの文章であるが、3段落から成っている。まず「腰元気質」という題からこの構成をみてみよう。

第一段落…なぜ腰元気質というのか、その由来が祖父母の出身階級から語られる。尾崎家に女中に出されたが、いわゆる腰元で「炊事洗濯まるでダメ」の口である所以が述べられる。

第二段落…貧乏暮しで子どもを満足に学校へもやれないのに女中を置いていた。母の説明によると父が気むずかしい坊っちゃんで身のまわりの世話をするのが精いっぱいだったからというが、真相は「炊事洗濯まるでダメ」の口だったからである。これを腰元気質の延長だったとみる。

第三段落…亭主の権威も失墜し、女中も置けなくなり、やむなく炊事をするようになるわけだが、夕食のため買い物に行ってもなかなか帰って来ないし、買い忘れはするしで、腰元気質の“なれの果て”というくだりである。

もう一つの主題〈母の像〉から構成を迫ってみると

第一段落…母の経歴が書かれている。ここにはまだく母の像〉は現れていない。

第二段落…腰元気質の延長である。だから自分の子どもの将来に関わる重要な問題であるのに、夫に自分の意見を述べたてでもなく、一喝されておしまい——夫の言いなりである。ここでも〈母の像〉は父の強大なる権威の前にはまったく臆気で、母であるよりも前に主人に仕える腰元の意識の方が強い。

第三段落…夫の権威が地に落ちたとき、夫から解放される。大げさにいえば、初めて自分の意志をもった人間として登場してくる。謡曲の先生となって多少の経済的基盤もできたので大変な社交家となり、買い物に行っても話がはずんでなかなか帰らない。夫の権威ありし日には思いも及ばなかったことであろう。腹を減らして待っている息子に「あーら遅くなってごめんなさい、話の長い奥さんにつかまっちゃってね」と屈託ない。子どもにからかわれても「何とでもおっしゃい。あーらあんまりあわててお大根買い忘れちゃった。誰か行ってきてえ」と子どもに対しては腰元気質はまったく見られず、だれからも束縛されない自由な人間

となって、ついには“大物”に昇格してしまうわけである。この母の最も母らしい、のびやかな、解放された〈母の像〉が出てきて完結する。

#### 4. 関連教材——その発展——

「母の像」は前にも述べた通り現在も毎月掲載されているが、この中から6篇選んでシリーズとして扱った折、そこに共通する疑問、問題が出てきた。「なぜこの母は意見を言わないのか」「自分の考えをもっていないのだろうか」「夫の言動をひどいとは思わないのだろうか」などという声である。もっともよく表れている例として関連教材「以心伝心」(野村万蔵)をあげてみよう。「母を語るとなると必ず父が飛びだして来る」という書き出しから、父の存在なしには母は語れない、つまり母はいつも父の影のようによりそっている存在だということがまずわかる。

『お父さんのお帰りでしょ』と大声で家族を起して歩くのは、いつも母だった。酒好きの父が、いつものように夜更けに酔っ払って帰宅したのである。父に怒鳴られるのがこわかった私は、ねむい目をこすりながらも、母といっしょに玄関に両手をつき、頭を下げて『お帰りなさい』という。そうしないと父は部屋に上がってこなかった。父は暴君のようだった。母は父によく尽した。尽しすぎたくらいである。ついぞ父とのいさかいの場面は見たことがなかった。ただ『お父さんより先に死にたくない』と子どもたちに密かにこぼしていた」

夜更けに子どもまで起して迎えさせる暴君のような父。なぜその非を説いて、せめて子どもの睡眠を保証するだけの母の強さが持てなかったのか。その上、父によく尽したという。「尽す」は「ある限りを出す、その極まで達する、終える」ということで、つまりは自己を捨てる、「滅私」である。自己を捨てれば当然いさかいの場面はないのだが、「お父さんより先に死にたくない」と洩らす母に、学生はやっと生身の人間を感じたようだった。

いったいどうしてこういう人間が存在したのか、全く不可解で、何とか

説明がほしくなるのは無理もない。「以心伝心」の結びには、「三従を地でいったようなやさしい母だったと思う」とあって「三従」ということばが出ている。ほかに劇作家田中千禾夫「てのひら」に「封建時代の女大学式の知識と能力を実行するためには——」とあり、また、彫刻家佐藤忠良の母は27歳で夫に死なれ6歳と2歳の子をひとりで育てたが『二夫に見えず』などという昔式の考え方が美徳かどうかを別として——」など出てき、それぞれ語句としての解釈はすませてあったが、改めて新しい疑問を解き明かす材料として「女大学」と「女大学批判」を読むことにした。

先の疑問を解く部分を見てみると「婦人は別に主君なし、夫を主人と思ひ敬ひ慎みて事ふべし。輕しめ侮るべからず、惣じて婦人の道は人に従ふにあり、夫に対するに顔色言葉遣ひ慇懃に謙り和順なるべし、不忍にして不順なるべからず、奢りて無礼なるべからず、是れ女子第一の勤也。夫の教訓有らば正しく答ふべし、其返答疎なるは無礼なり、夫若し腹立怒時は恐れて順ふべし、怒り諍ひて其心に逆ふべからず、女は夫を以て天とす。返々も夫に逆ひて天の罰を受べからず」とある。

ここから、夫のことを「主人」というのは、もともと封建制下の主従関係を示すことばで、家にあつては絶対の権威者が夫であるから、主人と呼ぶのだと理解できる。絶対の権威者の前には家族が滅私献身すべきであるから「以心伝心」の父の如き暴君の存在が許されたのである。また「腰元気質」の母のように、息子の進学についてさえ意見も言わず、夫の下知に従ってしまう。決して事の適否などをめぐって意見を述べ合ったりせず、もし夫に尋ねられたらそのときは正しく答えればいいのである。夫がどんなに残忍でも、いささかも恨むことなく、自分の仕え方の足りないことのみを反省すべきなのである。

このように関連教材、発展教材を用いれば、もう一段深い読みが可能となる。

以上、語句、文体、構成、そして関連・発展教材の使用というふうに、



段階を追って読解を深める方法を探ってみた。これをもう一度概括すれば  
第一段階…ことばの意味を辞書的に知ること。初級段階はこれでよい。

「ちょうちんがかざられる」という受身の練習の場合に、ちょうちんの  
文化的背景は不要である。

第二段階…文脈における意味を知ること。「母を語るとなると必ず父が  
飛びだす」の「飛びだす」を道路に子どもが飛びだすように理解してい  
たのでは困る。「思い浮ぶ」よりもっと瞬間的なことばであることまで  
理解したい。

中級はここまで達する必要がある。

第三段階…文体からの考察

第四段階…構成からの考察

第五段階…関連・発展教材からの考察

第三、四、五段階は上級で扱う範囲であろう。

どんな教材でも、第一、第二段階は欠くことができないが、第三・四・  
五段階の手順がいつもふめるわけではないし、ふむ必要もないと思う。腰  
元気質で詳述したほどいづも深く切り込む読みが必要だとは考えない。  
教材によっても、目標によっても方法は当然異なってくる。しかし、翻訳  
をする者にとっては、このようなことばの背景に切り込む読みは不可欠だ  
と思う。「良い翻訳をするのに、一番大切と思われる条件は、敏感な、心を  
こめた、精密な眼に富んだ、原文への尊敬でありましょう」(「和英翻訳—  
利点と問題点」講座日本語教育 第11分冊)と J. E. Fegan 氏も述べて  
いる。

#### 参 考 資 料

木村宗男「上級教材とその扱い方」講座日本語教育、第3分冊、1967.

“ 「読解指導について」 ” 第6分冊、1970.

“ 「教材と教授法」 ” 第4分冊、1968.

“ 「読解の指導方法」日本語教授法の諸問題、文化庁、1972.

北条淳子「上級クラスにおける読解指導の問題」日本語教育 21号、1973, 9.

安藤淑子「速読指導の実態と問題点」同上 29 号, 1976, 4.

小田切隆「速読について」ILT NEWS 61 号, 1976, 7.

塩田 勉「上級教材としての『よだかの星』」講座日本語教育, 第 13 分冊, 1977.

坪井佐奈枝「上級教材——ひとつの試み——」ILT NEWS 55, 56, 1974, 8.

” 「上級教材〈母の像〉シリーズ」同上, 62 号, 1977, 3.